

審査の結果の要旨

氏名 丸山 広人

本論文は、学校で生起する問題行動を日常的な学校活動の中から理解し支援するあり方の解明を目的とし、不適応的児童および生徒の学校生活における変容の過程に関し、フィールドワークと事例研究を用いて探究した研究である。論文は4部11章から構成される。

第Ⅰ部1章では、学校での心理的援助の展開の歴史が整理され、2章では学校臨床におけるアプローチとして、全体に対する生態学的アプローチ、個体群に対する生態学的アプローチ、個に対する臨床心理学的コミュニティアプローチの3アプローチを挙げ、第二次予防としての生態学的なシステムズアプローチの重要性を提示している。そして3章では、第二次予防的介入の必要な児童生徒と学級や学校の動きのダイナミズムを研究対象とし、参与観察と関与的観察を併用した方法という本論文の研究方法とモデルが示される。

第Ⅱ部は、小学校において多動傾向が強く発達障害の疑われる2名の児童を対象とする事例研究である。4章では、支援の受け入れ体制づくりと校長の介入のあり方が記述され、支援的コミュニティのあり方として、マイクロレベルだけではなく、メゾ・エクソレベルでの支援の重要性、校長のリーダーシップが指摘される。5章では、1名の児童の多動が収まっていく過程と受け入れ体制との関係を児童の経験世界に基づいて記述し、日常の学校での出来事の中での治療的意味の追究の重要性が示される。また6章では、教師と児童の1年間の相互作用の変化を分析検討し、教師が子どもの交流を促す働きを明らかにしている。そして7章では、スクールカウンセラーとして筆者が行ったスクールカウンセリング場面を検討し、複数システムの連携や環境調整の機能をスクールカウンセラーが担っていることを明らかにしている。

第Ⅲ部では、中学校において暴力を繰り返す1名の生徒に対するチーム援助のあり方を検討する事例研究である。8章では、学校に働く場の力に注目し、学校での共通の物語と個人の語りの相違に着目し、共通の物語に接近し、個人の語りとして語れるようになることが学校適応につながる関連性が示される。9章では、生徒に関わるチーム援助のあり方を、学校行事などの行動場面の圧力との関係で記述し、時期により生じる柔軟な対応と対応への葛藤過程の分析から、チーム援助やその崩壊の過程と担任、生徒の関係性と援助機能の関係が論じられている。10章では、スクールカウンセラーとして当該生徒に関わったカウンセリング事例から、学校においてケアを受容する能力を引き出し、生徒の興味の世界を友人と繋ぐ異空間的場所としての機能を相談室が有していることを示している。

第Ⅳ部11章では、上記小中学校での各事例研究を踏まえ、生態学的視座からの支援のあり方を総括して意味づけるとともに、今後さらに検討すべき課題を整理して論じている。

本論文は、長期に自らがコンサルテーションに関わった事例の記述解釈により、学校という場での支援のダイナミズムの可能性と課題を両義的に示す論文としての独自性を有しており、学校臨床心理学の分野に寄与する論文であると評価された。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するにふさわしい水準にあるものと判断される。